

書かれていたように、文章及び文字について深く考えるところがあった。殊に後篇序文には長文の「文体論」を付けてある。「余嘗て維新以来ノ文体ヲ觀察シ、聊カ心ニ会スル所アリ」として、文体が乱れていることも、複雑精密になつていく社会に適合するところから生れたので、一種の新体が必要になつたことを示したのだとした。現在の文体に漢文体、和文体、改直訳体、俗語俚言体の四体があるとし、その得失を論じて「経国美談」ではこの四体を併用した。この考えが「文章組立法」を経て、この「日本文体文字新論」が生れたのである。

龍溪先生はこの「日本文体文字新論」に於ては、「之ヲ学ブニ易クシ、之ヲ見ルニ便ニ、又之ヲ書クニモ、之ヲ見ルニ易クシ、之ヲ見ルニ便ニ、最モ日本ニ実益アル文字ナリト認ム」

という主旨から、ローマ字論の急教にも、假名文字論にも反対し、むしろ漢字を保存し、従来の和漢混用文を平易に通俗にし、漢字には振假名を付けた所謂「西文体」を主張した。その具体案として、ハナ字あるという漢字を三十乃至五十百字に制限することを主張し、後年「三千字引」を試作している。この主張は、ほぼ今日の実情に近いもので、四五十年前からこのことを主張したとは、さすが龍溪先生で、その先見の明に驚んだ卓見と言わねばを得ない。

さざんか

つい先日朝西谷を通つたら、路上にさざんかの紅い花が散らばって見えた。仰ぐ見上げると、塀の上でさざんかの花は、もう盛りをすぎている。

この屋敷はもと家中の住居、士族屋敷であるが、気がついて見ると、山際通りにもおちこち咲いて満開である。

城下新佐伯の秋も、いよ／＼深くなつた。

(H)

随筆

ぶんごせいき

—わたしの城下町—

東京部

賛助会員 石

田 靖

一

たちばなには象徴される日笠線に乗って大分を過ぎると、山の斜面や丘の上に蜜柑がたわわにみわたっている。先も風もさすがにはさわやかである。

いくつかのトンネルをくぐり、輝く海がまたが佐伯である。

街の背後に城山があつて、緑の木々がうっそうと繁り、前に番五川が流れている。

毛利氏二万石の城下新佐伯である。

旧佐伯藩は、豊後七藩のうち二万石の小藩であつたが、先代高範子爵は、優れた閣僚に恵まれていた。悲劇の宰相近衛文麿公爵千代子夫人、筑波侯夫人、黒田男夫人、音楽家近衛秀麿夫人など、いづれも佐伯の毛利家から出ている。

わたしの父豊城は、佐伯小学校の校長をしていて、傍ら毛利家の家塾教師として毛利邸に出入していた。

わたしの祖父徳平は若い頃、村から出て佐伯藩に仕えていた。階級は、小祿のお徒士であつた。当時は、士農工商の順位があつて、たとえ馬には乗れなかつたが、廿ムライであつたから、村一番の出世頭であつた。

徳平は能筆で、文才もあつたらしい。法事の記録のなかに、来客の模様を書いてあるが、灯ともし頃よりお出申候々とあつて、なかなかの名文である。人となりがかがえる。

明治前期の政治家で、文学者であつた矢野竜溪は、佐伯の産である。「経国美談」、「浮城物語」などの著書がある。当時の青少年に愛読されて、いわゆる洛陽の欲洒を高からしめた名著である。

竜溪は、この本の印税でヨーロッパに留学した。この本は、日本のベストセラー！ズの最初のものであり、竜溪は、印税成金の第一号であつたといえる。

明治の文豪岡本野矢は、明治二十六年十月、汽船に乗つて佐伯に來た。鶴谷学館の教師として約一年を過ごした。あたしの父豊城が独歩と同僚であつた。

独歩は、佐伯の風物を愛して、弟收二を伴い、昼と夜となく、佐伯の山河を逍遙した。独歩の名作「源おじ」、「春の鳥」、「鹿狩」などは佐伯に取材したものである。

独歩の頃の佐伯は、廢藩のあとからうらぶれたさびしい所であつた。

番匠川の河岸淋しく、大通りいずれもさび、軒端暗く、往來絶え、石多き横町の道は凍れり。城山の麓は、撞く鐘に響きて、屋根瓦の苔白きこの町の終より終へと、もの哀しげなる音の漂う……

独歩

旧城址の三の丸に在つた旧藩主の御殿が、あたしたちの教室にあてられていた。暗くじめじめした室であつた。秋には、裏手にあつた池の水に、ドングリがポトンと

落ちた。なぜか、忘れ得ぬ幼き日の思い出である。

春には、前庭に桜が一ぱい咲いた。その頃、佐伯にはまだ電灯がなく、街灯もなかつた。ぶらぶら提灯をさげて母のたもとにかかれて、夜の闇を歩いた思い出もある。

現在の佐伯市は、人口五万五千余人のミニ都市である。佐伯に鉄道が開通したのは、大正五年であつた。今では日笠線の特急、急行の全部がとまる。

鉄筋の市役所が建ち、佐伯文化会館が竣工した。ア！ケードの銀天街があり、デパートもある。一応近代都市の形態を持つている。

しかし、ここにも黒い公害が容赦なく押し寄せて、緑の影さうつした番匠川も青かつた佐伯の海も、今や興人の廢液によつて、まっ黒によごれてしまつた。白魚をさざる船も、廿ヨリの姿も消え失せた。

修学旅行に佐伯に來た山の小学生の作文に、「海の色は黒い」と書いてあつた。教師は、「海の色は青い」と教へてあつたのに……

街なかにあつた白い壁の武家屋敷も、佐伯特有の寒竹の生け垣も、今ではおおかたなくなつた。

竜溪や独歩を地下から呼びもどして、佐伯の近頃の變貌を見せたならば、さぞおどろき、かつなげくことであらう。

三の丸公園の一隅に、中根貞彦（もと三和銀行頭取）の歌碑が立っている。

ふるさとの移らうもう（憂）しふるさとの
かはらぬもうしは（愛）しきふるさと

（東京都中野区新井町三、一八、四在住）